# いまさら、初恋

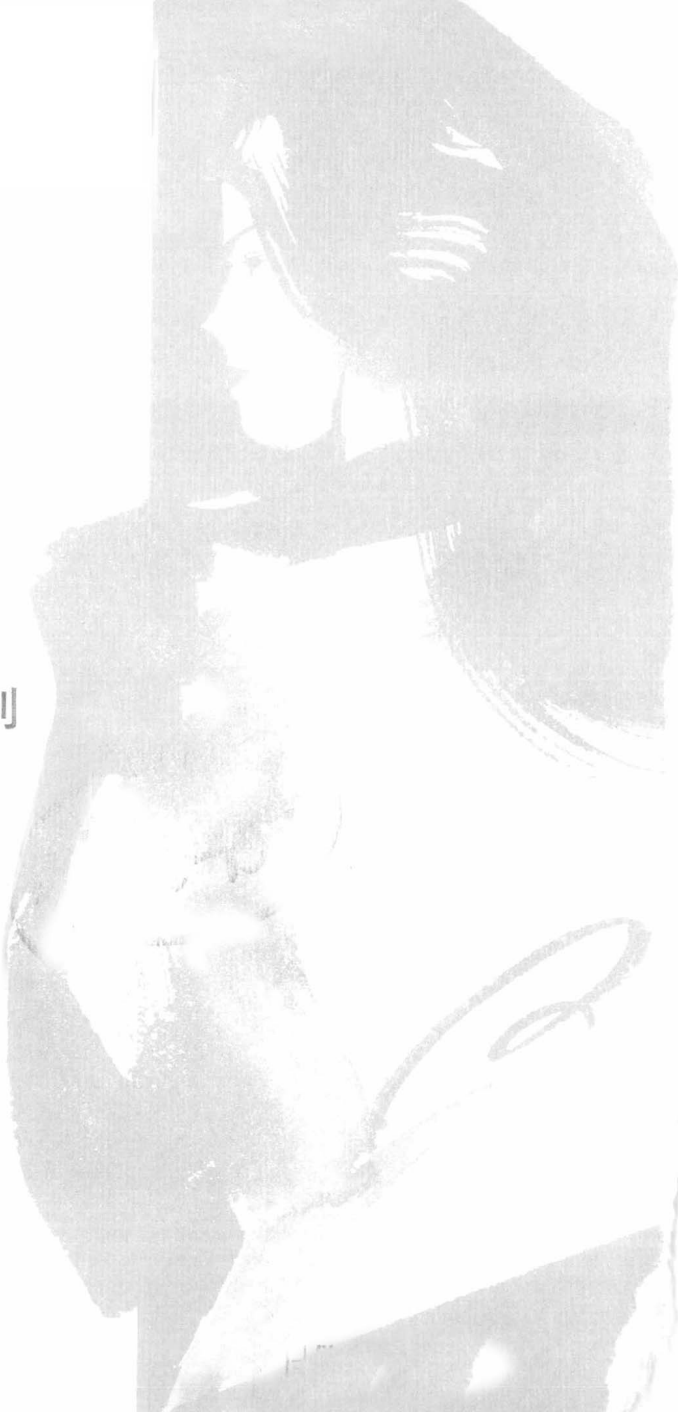
yamashita katsutoshi

山下勝利

# いまさら、初恋

山下勝利

朝日新聞社



いまさら、初恋
Printed in Japan
©Katsutoshi Yamashita 1988
ISBN4-02-255901-2
第1刷発行1988年9月30日

定価:1,000円
著者:山下勝利
発行者:八尋舜右
印刷所:凸版印刷
製本所:青柳製本
発行所:朝日新聞社
東京都中央区築地5-3-2
〒104-11　振替東京0 1730
電話03-545-0131(代表)
編集—図書編集室
販売—出版販売部

# いまさら、初恋・目次

第一話　イチゴ、口へ　（一期一会）　7
第二話　順序、変えん　（純情可憐）　18
第三話　どうしよう？　イブ　（同床異夢）　29
第四話　帰ろう、凍結　（偕老同穴）　39
第五話　記憶ない、チューリップ　（局外中立）　50
第六話　再会、ヨックモック　（斎戒沐浴）　60
第七話　なんかこう、気楽　（難攻不落）　71
第八話　競うのは、ノー　（帰巣本能）　81
第九話　そんなん、せんのよ　（善男善女）　91
第十話　平気よ、もどって　（軽挙妄動）　101

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第十一話　今度、ちょうだい　（捲土重来）　112
第十二話　知らんのは、マレ　（出藍の誉れ）　123
第十三話　ナイショのころ　（内助の功）　133
第十四話　ふっとまた、こう妬く　（二股膏薬）　143
第十五話　ごめん、そうか　（四面楚歌）　153
第十六話　こいつ、剝けん　（孤立無援）　164
第十七話　女房がいい？　（容貌魁偉）　174
第十八話　友情、いっぱい　（優勝劣敗）　185
第十九話　蜜か、剣か　（三日天下）　196
第二十話　フフ、これ口実　（日々是好日）　207
あとがき　218

装画・百田まどか
装幀・菊地信義

# いまさら、初恋

# 第一話　イチゴ、口へ（一期一会）

汗ばんだ腕を女の頭からそっと抜くと、男は薄暗がりの中で女の頬に唇を寄せた。傍らに横たわっている女が愛しかった。久し振りに味わう感情だった。体より心が満ち足りたような気がする。

唇に触れた女の頬は濡れていた。

泣いているのだろうか。

半身を起こすと男は女の顔を覗きこんだ。洗面所から洩れる微かな明かりだけが頼りだから、ベッドの上は暗い。女が室内の明かりを全て消すように言ったからだ。

いや。見ないで。

眠っていると思った女はそう言うと、シーツの中に潜る代わりに男の胸に顔を埋めた。細い肩だった。腰にも肉がついていない。子どもを生んでいないからだろう、胸だけがやさしく張りつ

めていた。二十年あまり前とまったく変わっていない。あの頃よりもむしろ痩せたかもしれない。

ごめんなさいね。

女が男の顎の下で囁いた。男は一瞬なんのことか考えた。妻のことを言っているのだろうか。妻と女は古くからの友人だ。これ以上の裏切りはない。

私から無理を言って。でも、一度だけこうなりたかったの。

妻のことを言っているのではないと分かって、男はほっとした。こうした場所では触れたくない話題だ。しかし、ホテルに誘ったのが果たして女のほうだったのかどうか、男は覚えていない。以前からの約束のように、ごく自然にこうなっていたからだ。

遠慮がちに女から、時間が取れないかと電話が入ったのは前日のことだ。男はその連絡を心待ちにしていたともいえる。

二週間前、男は会社の部下の結婚式で女に会った。その前に会ってから、五、六年になる。あのときは、男が家に帰ると女がいた。妻のところに遊びにきたらしい。

妻とは年に一、二回行き来しているようだが、男は滅多に顔を合わせたことはない。女が来ていると分かった日は、帰宅を遅らせていたからだ。女が帰った後で、妻がそれとなく口にする皮肉とからかいを聞くのも嫌だったし、会うとどこか面映ゆいところがあったのも事実だ。二十年以上もたったのに、自分でも不思議だ。これが青春の尻尾とでもいうやつだろうか。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

結婚式のときは、当日まで女が出席することを知らなかった。男にとっては部下に頼まれて仕方なく引き受けた最初の仲人だった。披露宴の冒頭の挨拶のことで頭がいっぱいで、出席者の顔ぶれまで目に入らなかった。

挙式のほうはホテルの流れ作業で、あっという間に終わった。披露宴が始まり、仲人のスピーチとなって立ち上がったとき、新婦側の招待客の中に女の顔があることに気づいた。

それでなくとも緊張していたのに、男は用意した原稿を持つ手が嫌になるほど震え出したのを覚えている。女のほうをなるべく見ないようにして、型通りの内容の挨拶を最後まで読み通した。腰を下ろすと汗がどっと噴き出すのが分かった。

来賓の祝辞になって、やっと女のほうを見ると、女が微かに頷いた。

……と、新郎新婦は初恋同士の結婚であると聞き及んでおりますが、実は本日の仲人もまた初恋でゴールインして今日まで円満に過ごしておるのでございます。で、ありますから……。

先輩に当たる本部長の長い祝辞の中に、自分のことが出てきて、男ははっとした。思わず女のほうに視線を走らせた。女は俯いていた。テーブルの端の妻を窺うと、妻は満面に笑みをたたえて、女を見つめていた。

宴が果てて、会場のロビーで男が一息入れていると、女がそっとそばに立った。

ご苦労さまでした。あの子、と花嫁の名を言って、私の遠縁に当たるんですと付け加えた。

男が返事をしようとしたとき、進行係を務めていた青年が呼びにきた。

では、また。
女がそう言って頭を下げた。
またって、またはあるんですか。
緊張が解けるとともにアルコールが急激に回ったのか、つい冗談が口をついた。
また。
女は静かに笑うとそのまま出口に向かった。男はその後ろ姿を黙って見送っていた。なにかが始まるという予感を握りしめながら。
女から勤め先に電話がきたのは、それから二週間後だった。男は翌日の夕方に会う約束をした。
その朝、男は妻に接待で遅くなると伝えて、家を出た。妻はあなたの肝臓ですからと言っただけだった。
ホテルのコーヒーハウスで会って、すぐバーに席を移した。アルコールの力を借りなければ口が軽くならない。それは女も同じだったとみえる。グラスを傾けているうちに、二人の間の垣根がひとつずつ消えていった。
こんなふうにして話すのは二十年ぶりのことだ。いや、あの頃も目に見えない壁があったような気がする。今はそれがない。歳月というのはすべてを流してしまうものなのだろうか。思い出までも。

食事の時間になったので女を誘うと、場所を変えたくないと言う。席を立つとこの雰囲気が壊れてしまうとでもいうような言い方だった。それで簡単なスナックとフルーツを頼んだ。男も今の空気に浸っていたい気分だった。

何杯目のウイスキーを空けたときだろう。女がガラスの器に盛られた果物の中からイチゴを選ぶと、小さなフォークに突き刺して宙にさまよわせた。目は男の目の奥を覗きこんでいた。

男は女の手を捕らえると、フォークを引き寄せてイチゴに歯を立てた。甘酸っぱい香りが鼻をついた。と同時に、胸の中に押さえていた思い出が甦ってきた。

あれは男が大学の三年のときのことだった。隣町に住む叔母に頼まれて、女子高生二人の家庭教師を始めた。高校の二年生でそろそろ受験勉強に本腰を入れたいというわけだ。それが目の前にいる女と男の妻となる二人の少女との出会いだった。

相手が年頃の少女ということで、最初のうちはなんとなくぎごちなかったが、日が経つにつれて慣れてきた。

ひとつには、三年後に結婚することになる少女の、明るくあっけらかんとした性格に負うところが大きい。

なぜ二人で一緒に勉強するかというと、一人だと危ないってお母さんがいってたから。

そんなことを平気でいう少女だった。その明るさに好感を持ったのは事実だが、男はもう一人の口数の少ない少女に次第に惹かれていった。それはたぶん、二人の少女にも分かっていたと思

う。

家庭教師として通うようになって、半年ほど過ぎた日のことだ。少女の一人に用事ができて途中で帰った。残ったのは無口なほうの少女だ。たしかあれはその少女の部屋だった。なんとなく気づまりなうちに、一応の教科をこなした。終わるといつもお茶になる。その日は紅茶とイチゴが出た。待ちわびた時間だったにもかかわらず、男には話す言葉がなかった。胸だけが高鳴っていた。急いで紅茶を飲み干すと、腰を上げた。

待って。レコード一枚だけ聴いていきませんか。

そう言うと少女は男の返事も待たずに立ち上がって、小さなプレーヤーにレコードを載せた。曲は「真夜中のトランペット」。男は黙って座り直した。これでもうしばらくは一緒にいられる。

ハイ、これ。

男がレコードに聞き惚れたふりをしていると、思いがけぬ近さで少女の声がした。

見るとフォークに刺したイチゴが目の前にあった。手で受け取ろうとすると、フォークが逃げる。少女を見ると口許が笑っている。男も笑いながら口を開けたが、さすがに大口を開くわけにはいかない。前の歯で受けるとそのまま噛んだ。途端に、ぱっと果汁が少女のブラウスの胸に飛んだ。

ごめん。

慌ててイチゴを飲み込みながら手を差し出した。胸に手が触れたのが先か、少女が体ごと男に

ぶつかってきたのが先か、気がついたときは少女を抱いて唇を合わせていた。夢にまで見たことが現実となっていたのだ。

想像の世界では、男は限りなく優しいはずだった。それが現実となると妙に猛々しくなっていた。少女のからだから力が抜けていたからかもしれない。片手でブラウスのボタンを外すと、少女の胸を口に含んだ。イチゴよりもっと甘美な味が口中に広がった。

あのとき、階下から娘の名を呼ぶ母親の声がしなかったら、どうなっていたのだろうとその後何度か思ったことがある。

少女は男の腕からするりと抜けると、大きな声で返事をしながら部屋を出た。男は挨拶もそこそこに少女の家を辞した。

自宅までの帰り道、男は電車に乗らず歩いて戻った。それくらい気持ちが高揚していた。いま飛び上がれば、月までだってとどくのではないか。

しかし、月までは遠かった。期待を込めて次の家庭教師に出掛けたのに、少女の態度はあまりに素っ気なかった。もう一人の友人が首をかしげるほど他人行儀だった。

何回か通ってもそれは変わらなかった。二人きりになるチャンスを作っても、少女は唇すら許そうとしない。

男が問い詰めると、怖いという。あなたがではなく、自分が怖いと。男にはそれが男を避けるための口実としか聞こえなかった。なぜなのだろう。あれはなんだったのだろう。

中途半端な思いのまま数カ月が過ぎた。

ある日、少女の家での勉強を終えて帰ろうとすると、友人のほうの少女が相談したいことがあるという。あまり気が進まなかったが、教え子の頼みとあれば仕方がない。それにあの少女の気持ちを、それとなく聞き出したいという考えもあって家までついて行った。

普段ははっきりとものを言うくせに、その日に限ってなかなか口を開かない。受験のことかと尋ねると首を振る。そして、やっと口にした言葉がこうだ。

先生、私のこと、どう思っているんですか。

突然のことで男は返事に窮した。いつも悪戯(いたずら)っぽい目を輝かせているのに、今日はどことなく沈んでいる。

うーん、いい子だと思っているよ。もうちょっと勉強に身を入れればもっといい子だと。

気を引き立てようとふざけた口調で答えた。

違います。好きか嫌いか言ってください。

それは精一杯の愛の告白だった。目に涙が浮かんでいた。

嫌いなわけがないじゃないか。

たじろぎながらも男はそう答えた。答えてから男はその言葉に嘘(うそ)がないだろうかと考えた。そう、嘘はない。好意は持っていた。だけど……。

そこまで順を追って思い出してから、男はホテルのバーに居ることに気がついた。この先を追



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com